

# 町工場とコミュニティ

——韓国・大邱北城路で働く技術者たちの語りから——

松井 理恵

## The Links between Small Factories and a Local Community:

A Case Study of the Narratives of Local Workers in the Bukseongro Neighborhood of Daegu City, Korea

Rie MATSUI

要旨： 本稿は、韓国・大邱北城路の町工場で働く技術者たちの語りから、彼らが働く地域コミュニティにアプローチする試みである。韓国のコミュニティにおける地縁的ユニットと社会的ユニットのズレを指摘する文化人類学研究をふまえ物理的存在の共有と利用に注目し、さらにコモンズ論を参照しつつ技術者たちの語りを分析した。技術者の語りから北城路の歴史を再構成すると、米軍部隊、農村、産業化の進展、郊外における工業団地造成といった外部からの影響を組み込み、その役割を変化させながら今日まで工業の拠点として維持されてきたことが明らかになった。北城路は資材、部品、工具、機械といった町工場が必要とされるモノが手に入れやすいに加え、複数の町工場にまたがる生産工程、言い換えるならば技術者たちの協働が可能であるため、あらゆる注文に対応できる。また、技術者たちは日常的な交流や親睦を通じて技術に関する情報交換や相互扶助をおこなっている。このような過程を通じてそれぞれの技術者が体得した技術は、北城路という物理的制限の多い空間の維持を可能にする。物理的存在によって結びつけられ、関係を築く北城路の技術者たちの語りからは、組織への注目だけでは捉えられない都市のコミュニティのあり方が浮かび上がってくる。

キーワード： 韓国、都市、コモンズ

## 1. 問題関心

本稿は2016年に刊行された『手で創る未来——北城路鉄工所』(韓国語)というテキストを用い、韓国の地方都市、大邱・北城路の町工場<sup>テグ フクソンノ</sup>で働く技術者たちの語りから、彼らが働く地域コミュニティを照らし出す試みである。

大邱でフィールドワークを開始してから15年余りが経過したが、この間コミュニティの捉えがたさと向き合い続けてきたといっても過言ではない。その背景にはコミュニティを体現する組織の不在がある。伊藤亜人は韓国の都市社会の特質として「韓国の都市においては日本の都市にみられる町内のような自治的な性格を有する地域組織が未発達な点」(伊藤 2002: 197)を挙げる<sup>(1)</sup>。つまり、日本における町内会や自治会に該当する組織が韓国の都市にはみられないのである。

韓国には日本による植民地時代、日本の隣組の成立と同時期に成立したと考えられる班<sup>バンサンフェ</sup>常会という組織がある。この班常会は1970年代、セマウル運動<sup>(2)</sup>によって活性化された。鳥越皓之によると、班常会は日本の地域住民組織の特徴として指摘される基本的五要因(世帯単位制、地域占拠性、全世帯加入制、包括的機能、行政の末端機構)を満足する、日本の町内会などに限りなく近い組織である(鳥越 1994)。1978年に大邱市が刊行した『班常会白書 1976～1978』に掲載されている当時の「大邱市統・班設置条例」及び「大邱市班運営規則」によると、およそ20から30世帯で構成される班は毎月班常会を開催するよう定められていた。しかし、2009年に大邱広域市中区のある洞<sup>ドン</sup><sup>(3)</sup>事務所への聞き取り調査をしたところ、班常会は開かれていなかった。その代わりに、いくつかの班で構成された統<sup>トン</sup>という

組織の統長が集まって毎月会議を開いているとのことであった。この統長会議を含め、当該の洞には8つの住民組織があるとのことだったが、世帯ではなく個人が地区の代表者として加入する形態をとっていた。それはコミュニティが組織化されているというよりも、複数のネットワークが重なりながら地区についての認識を深めて共有していく仕組みのようであった(松井 2011)。

そこで本稿は、組織とは異なる視角から韓国の都市コミュニティを描きたい。日本人研究者による韓国の文化人類学研究的蓄積を手がかりとし、町工場が集まる地区をある種の「コモンズ」と位置づけることによって、韓国の都市におけるコミュニティに向き合うことが本稿の目的である。

## 2. 先行研究

韓国の都市研究において、コミュニティはあまり注目を集めてこなかったように思われる。その理由として「韓国社会では、(中略)個人的な関係に拠る人脈を駆使した主体的かつ臨機応変な対応が重視されている」(伊藤 2002: 206)ことが挙げられる。たとえば、都市に移住した新興住民にとっては契<sup>キョウ</sup>(<sup>4</sup>)、同郷会、同窓会といった任意結社組織が都市で生活していくために有効な手段とされた。換言するならば、韓国の都市においてはコミュニティよりもアソシエーションが重要とされてきたのである。ただし、伊藤は都市における任意結社組織の果たす役割を考える際には社会状況をふまえなければならないと指摘する(伊藤 2002)。つまり、社会的な要請があるからこそ、人びとは任意結社組織を重視するのであって、社会状況が変化すれば任意結社組織が果たす役割も変わっていくという。敷衍するならば、韓国の都市においてコミュニティよりもアソシエーションが重視されてきた背景にある社会状況を確認しておく必要がある。すなわち日本による植民地支配、朝鮮戦争、急激な産業化といった激動の中で多くの人びとが国内外の移動を余儀なくされた結果、移動しても継続可能なアソシエーションこそが社会要請に応える組織として重視されるようになったと考えられる。

一方、韓国の都市におけるコミュニティを考える際に、ヒントとなる村落研究がある。嶋陸奥彦は「トンネ(동네)」と「マウル(마을)」という韓国語を手がかりとして、韓国のムラにおける地縁的ユニットと社会的ユニットのズレを指摘する。嶋によると、トンネとマウルを日本語に翻訳すると両方ともムラとなることからわかるように、トンネとマウルの意味は重複する部分大きい。しかしながら、その違いに着目するならばトンネは地縁的ユニットの側面が強く、一方マウルは社会的ユニットの側面が強い。このトンネとマウルの違いを、嶋はムラの組織を例に挙げて説明する。ムラのトンネ、すなわち地縁的ユニットの側面を示す組織に大洞会<sup>デドンフエ</sup>がある。大洞会を構成するのはムラの地域内にあるすべての世帯である。これに対して、社会的ユニットの側面を示す組織はムラの人びとの相互扶助<sup>アドンキョ</sup>を目的とする組織である。ムラによって名称は異なるが、ここで大洞契<sup>アドンキョ</sup>という名で代表されるこの組織は「ムラの人みんな加入する」(嶋 1984: 13 強調引用者)といわれている。ムラの生活において大洞会と大洞契は表裏一体の自治組織であるように捉えられている。

しかしながら、嶋によると大洞会と大洞契の構成員が完全に一致する例は少ない。たとえば、地域内に住んでいるにもかかわらず大洞契に加入していない人としては、来住して間もない人や近い親族が加入しているから自分は加入する必要がないとする人がある。また、地域内に住んでいないにもかかわらず大洞契に加入している人としては、もともと地域内に住んでいたが地域外へ転出していった人がある。このようなケースから嶋は韓国のムラにおいて「個人を結ぶ紐帯が、集団の(たとえば地縁的な)ワクに対して自律性をもっている」(嶋 1984: 14)ことを見出し、「重複する部分の大きさゆえに同一のものであるかの如くにたちあられ、かつ意識される地縁的ユニット(トンネ)と社会的ユニット(マウル)が、実は決定的なところでズレているように思われる」(嶋 1984: 12)と指摘するのである。

以上の嶋の研究をふまえるならば、韓国の都市においてコミュニティが捉えがたいのは、地縁的ユニットと社会的ユニットのズレが大きく地縁的ユニットが空洞化しているからであると考えられる。では、どのような場合に地縁的ユニットと社会的ユニットのズレが小さくなるのだろうか。ここで注目に値するのは、嶋のフィールドワークにおける唯一の例外である。嶋は次のように述べる。「筆者がこれまで長期間の調査を行なった二つのムラと、短期間の訪問ではあるが大洞契について尋ねた一〇余りのムラにおいて、ムラの地域への転入およびそこからの転出が自動的に

大洞契への加入および脱退を意味していた例は一つしかなかった。この一例では、名称は大洞契だが、別名を泉契セムキエというように、かつてトンネに一つしかなかった共同井戸の維持が大きな目的となっていたのである」（嶋 1984: 13）。確かに、共同井戸の維持が目的ならば、来住して間もない人であっても共同井戸の利用のためには加入せざるを得ないし、転出すれば共同井戸を利用できなくなるので加入し続ける理由がなくなる。この例外が示唆するのは、物理的存在の共有と利用が地縁的ユニットと社会的ユニットを一致させる契機になることである。

物理的存在の共有と利用からコミュニティにアプローチするうえで参考になるのが、これまで主に自然資源の利用をめぐる議論されてきたコモンズ論である。コモンズという用語には①「みんなの」共有資源そのものと②共有資源をめぐる人と人との関係を規定する所有制度という2つの意味が含まれている点をふまえて利用・管理に着目した井上真は、コモンズを「自然資源の共同管理制度、および共同管理の対象である資源そのもの」（井上 2001: 11）と定義する。社会的な自然資源の共同管理制度とその共同管理の対象である資源そのものを不可分なものとして位置づける点は、物理的存在の共有と利用という視角から地縁的ユニットと社会的ユニットの重なりに焦点を当てる本稿にとって示唆深い。

先述したようにコモンズ論は自然資源を対象として議論されてきたが、近年コモンズ論の視角から都市を捉える研究も進んでいる。武田俊輔（2019）は滋賀県長浜市の中心市街地を構成する「町内」である「山組」という地縁組織を対象として、近世以来の歴史を持つ地方都市の社会関係と社会的ネットワークについて明らかにする。武田は都市祭礼をさまざまな要素からなる資源の調達と用益の生産・配分をめぐる一連のサイクルの管理という意味でコモンズと位置づける。特に本稿が着目するのは、「町内というコミュニティは自分たちの共同性を創出する全体的相互給付関係をうまく継続するために必要な資源を獲得するべく、実際にはそうした外部の社会状況にうまく適応する形で町内の人びとは祭礼のやり方や位置づけ、組織をフレキシブルに変えてきた」（武田 2019: 258）という指摘である。すなわち、都市におけるコモンズは外部からの影響を組み込みながら維持されているのである。

さらに、コモンズ論の都市への応用を考えるうえで示唆深いのは、ある場所や自然が「みんなのもの」として位置づけられて個人の自由で無方向な利益追求が制限される背景、すなわち社会的な力への注目である。藤村美穂によるとコモンズを成立させるのは、コモンズが『みんなのもの』であることを可能にする社会的なしくみ、すなわち人間の行為の範囲や方向をかたちづくる社会的な力なのである」（藤村 2001: 34）。そこで本稿は、物理的存在を介した人びとの関係に焦点を当て、そこに存在する社会的な力を描くことによって、都市のコミュニティを捉える。

大邸の旧市街に位置する北城路の町工場で働く技術者たちは、資材、部品、工具、機械といった物理的存在を介して日々かかわり合っている。そこで、本稿は物理的存在を共有し、利用するコミュニティとして北城路を位置づけ、コモンズ論を参照しつつ韓国の都市におけるコミュニティにアプローチする。

### 3. 事例の概要

#### (1) 町工場で働く人びとの語りからなるテキスト

本稿がテキストとするのは、大邸の市民団体である時間と空間研究所が調査、執筆、写真撮影等をおこない、大邸広域市中央区片が2016年に刊行した『手で創る未来——北城路鉄工所』（以下『手で創る未来』）である。このテキストは北城路にある10軒の町工場、そしてその町工場を運営する10名の技術者を取り上げ、町工場ごとに技術者のプロフィール、一日のスケジュール、生活史、仕事場の様子、使っている道具、技術といった項目に分け、町工場が何をやる場所なのか、技術者が何をやる人なのか、町工場になじみのない一般市民にも理解できるよう記述されている。なお、本稿では便宜上「町工場」という言葉を使って表現しているが、その規模はさまざまである。日本語の町工場という言葉から想像されるような広さを持つところもあれば、町工場というよりは小さな作業所と表現したほうがよいようなところもある。

215ページにわたる『手で創る未来』は文章だけでなく、北城路の町工場、そして町工場で働く技術者たちを撮影した数多くの写真によって構成されている。加えて、写真では表現が難しい町工場の全体像を俯瞰的に描いた素描も添えられている。町工場や道具、技術の説明にはどうしても専門的な用語が必要になる。また、それぞれの技術者が

もつ技術をテキストのみで理解するのは非常に難しい。そこで、写真や素描がテキストを補う役割を果たしている。  
 なお、テキストに登場する技術者の仕事内容は多様であるが、技術者としての経歴が40年から60年程度、北城路で働くようになってから30年から60年程度のベテランが多い。

## (2) 大邱広域市中区北城路の概要

テキストの分析に入る前に、北城路が位置する大邱の概要と北城路が現在置かれている状況について言及する。大邱は朝鮮時代以降、朝鮮半島の東南に位置する嶺南地方<sup>ヨソナム</sup>の中心地とされてきた内陸都市である。19世紀末には日本人の入植が始まった。当時の大邱は大邱邑城<sup>ウプソン</sup>という城郭に囲まれた都市であった。しかし、20世紀初頭には日本人居留団の強い働きかけもあり大邱邑城が撤去され、その跡地には道路が造成され、多くの日本人が入植した。なお、北城路という地名は大邱邑城の北の城壁の跡地であることに由来する。朝鮮半島は1945年に日本の植民地支配から解放されたが、1950年には朝鮮戦争が勃発する。韓国側が大邱の大部分を掌握し続けたため、大邱には各地から避難民が集まった。その後、韓国の高度経済成長期に入ると大邱は繊維産業で栄えたが、繊維産業の衰退とともに都市も停滞していく。韓国では2000年代に入ると、北城路のような旧市街地の空洞化が社会問題とされ、全国的に都市再生政策が進められるようになった。北城路もまた再開発の圧力にさらされ続けてきた(松井 2017)。2019年10月には北城路の一部の建物が撤去され、2021年12月現在マンション建設が進められている<sup>(5)</sup>。

埼玉の見沼田んぼを「首都圏／東京という歪に肥大化した身体の肛門から(中略)排出されたものたちが、思わぬ形で出会い、ぶつかり、交わる、すれ違う。そこでものともものが交わり、熱が生まれる」(猪瀬 2019: 29) 場として描いた猪瀬浩平は、見沼田んぼとその周辺の空間の地域史を紐解く。そのなかで、ごみ処理場の立地から中心のなかの辺境という問題を解く箇所において、豊かな農地をもち、東京の市場へのアクセスという観点からも有利であった農村が、東京一極集中にともなう都市開発によって辺境として開発され、ごみ処理場や畜場が立地する地域となる過程を明らかにした。本稿が着目するのは、この過程が土地の記憶、すなわちこの土地を豊かな土地と考えて農業を営んできた人びとの経験を等閑視することによって成立したという猪瀬の指摘である。

次章では、空洞化した旧市街地であり、再開発の対象としてまなざされる北城路でこれまで働いてきた技術者たちの語りから北城路の歴史を再構成する。それは再開発の圧力の下、忘却されつつある北城路の土地の記憶に焦点を当てる試みである。

## 4. 町工場の技術者からみた北城路の歴史

### (1) 朝鮮戦争、農業の機械化、そして産業の発展

工具・機械流通の拠点であり、町工場が立ち並ぶ北城路の歴史は朝鮮戦争にまで遡る。大邱に駐屯する米軍部隊から流れてきた物資が流通したのが今日の北城路をかたちづくる契機となった。自分の町工場が位置する地域の全盛期を1953、1954年ごろと答える技術者は次のように述べる。

朝鮮戦争直後のここが「缶通り」と呼ばれていた時期、街には棒で缶を叩く音が途切れなかった。米軍部隊から出てくる缶詰やドラム缶を開いてオイルランプ、屋根、ジープなど、何でもつくることができた時期だった。(『手で創る未来』: 15)

当時の北城路を知る他の技術者も次のように話す。

この通り(大邱銀行北城路支店～達城公園十字路の間)は「自動車部品通り」と呼ばれていたんだ。6.25動乱<sup>(6)</sup>が終わり、軍用車が廃車になったり、払い下げられたりして、こっちのほうにたくさん入ってきたと。そのときはまだ国産車がなかった。だから、軍用車から使えそうなものを取り外して組み立てて、ドラム缶をやたらめつたらに叩いてまっすぐにしてカバーを作って、そうやってバスも作ったんだ。そういう部品の店が50～60ヶ所

くらいあった。機械を扱う店は5ヶ所くらいしかなかった。私が入ったところは「東洋社」という、やはり軍需品が横流れ品として出てきた小型エンジンや発電機のようなものを持ってきて売って直して。そういうところだった。そこに20年いた。([『手で創る未来』：178])

当時、米軍部隊から流れてきた軍需品は大っぴらに売られてはいたが、いつ捕まって連れていかれるかわからない危険な仕事でもあった。

当時、東大邱駅の近所の山にある通信隊や米韓合同部隊から軍需品が流れてきたのだが、そのまま持ってきたらぶっ殺される。使えないものとして詰めてこなければならぬと。たまには数を誤魔化すために使えないエンジンを持っていき、新しいのを持ってくることもしたさ。でも、あまりにも軍需品が流れていくから北城路に刑事たちと憲兵たちが取り締まりに来た。でも、普通は刑事に話をつけておくから、これから取り締まりが行くと刑事があらかじめ教えてくれる。そうすると、早く店を閉めるんだ。当時はシャッターがなかったから鉄板で塞いだ。看板もろくにないからせいぜい立て看板を立てていたんだが、それを早くしまい込んだんだ。取り締まり班が来るとなると、誰かがあの上から通り過ぎながら「風が吹くぞ」と言う。それが「取り締まり班が来る」という意味だ。そうしたら、すばやく店を閉めて、前に出ていた。([『手で創る未来』：178-9])

こうして北城路は資材や部品、工具、機械の流通、そして町工場が立ち並ぶ地区となっていった。その後、農業の機械化が進められると北城路は農業機械の生産に携わるようになる。

(北城路の全盛期は：引用者注) 1970年代末から80年代末の間。その頃は、田舎の耕地整理もまだできていなくて、ダムもなかった時期だから、農繁期にさえなれば農村から量水器（低いところの水を高いところに汲み上げる機械：引用者注）を買いに、あるいは直しに来る人びとがうようよしていた。([『手で創る未来』：35])

テキストに登場する10名の技術者たちの多くが北城路の全盛期は1980～1990年代と答えている。さまざまな分野で産業が発展していくと北城路もまた栄えていったのである。当時の繁栄ぶりを技術者は次のように語る。

その頃は北城路から人がいなくなることがなかった。車が一度入ってくると、出ていけないくらいだったのだから。([『手で創る未来』：55])

その頃は北城路の工業所の区画が空いたらすぐに他の工業所が入って埋まった。うちの店のような小さい工業社が、おびただしい数の工業社が、たくさんできた時期だ。機械を1、2台ずつ買い求めて開業をしても食っていけるくらいだった。([『手で創る未来』：75])

一方、仕事を続けてきてもっとも大変だった時期は技術者によって答えにばらつきがある。工場で深刻な事故が起きた時期や不渡り手形をつかまされた時期を挙げる技術者もいるが、韓国経済全体に大きな打撃を与えたIMF通貨危機を挙げた技術者が3名いた<sup>(7)</sup>。また、2名の技術者は今がもっとも大変な時期であると言う。

(仕事を続けてきて、もっとも大変だった時期は：引用者注) 今。今よりはIMFのときのほうがまだよかった。その当時はお金を踏み倒されて餌食になることが多かったから大変だったんだろう。今よりは仕事も多く、楽しかったし、人情もあった。今は完全に索漠としているように思う。([『手で創る未来』：75])

このように北城路で働く技術者が厳しい状況に追い込まれた原因として、先述した大邱の基幹産業である繊維産業の衰退、IMF通貨危機などが考えられるが、加えて重要なのが、1990年代から本格化した店舗と町工場の郊外移転

である。日本による植民地時代に開発された北城路の区画は狭く、建物の老朽化も進んでいた。資材や部品、工具、機械を扱う店舗や町工場にとって郊外に整備された工業団地への移転は、このような物理的な限界からの解放を意味した。そして、それまで北城路に集中していた工業の拠点が郊外に移転したことにより、北城路の空洞化が進むことになる（松井 2018）。その結果、北城路に残った町工場は厳しい状況に置かれているのである。

## (2) 北城路の町工場が果たす役割

1950年代に資材や部品、工具、機械の流通、そして町工場が集まる地区として勃興し、1980年代から90年代にかけて全盛期を迎え、その後郊外移転によって空洞化した北城路は工業の拠点としての役目を終えてしまったのだろうか。ある技術者は大量生産する工場と比較しつつ、現在北城路が果たしている役割を次のように述べる。

ギアを削るのが専門なので、昔も今もギアの溝を掘ってやる仕事をする。大きな工場では通常注文数が多い仕事を受け、そういうところでは受けない10個、20個単位の仕事をここでやってあげると考えればよい。（『手で創る未来』：95）

大きな工場ではまとまった数を注文しないと仕事を受けてくれないが、北城路では少ない個数でも注文を受けられる。発注する側の必要に応じて柔軟な対応ができるのが北城路の町工場の強みといえるだろう。これは機械製作や部品製作にとどまらず、機械修理にも当てはまる。

機械一つが作動するのに、ある小さな部品一つが故障したなら、大量生産業者ではこれ一つだけに、（対処：引用者注）してはくれないんだ。そういう場合にうちに持ってくるんだ。たとえば、ボルト一つ買うのに30～40ウォンかかるのだけど、そのボルトが売っていなかったなら、うちに来て5～6千ウォンかかっても作るんだ。また、何かの機械とか故障したのを持ってきて「直して」、「溶接して」と言われれば、直してやる。安くたくさん作るのは機械がやっても、どこが故障したのか突き止めて、開けて直すことに関してはうちのノウハウにはかなわない。（『手で創る未来』：59）

一つの機械を大量生産することによって安く売る工場で作られた機械を買うとしよう。その中の小さな部品一つが故障して使えなくなった場合、その工場は対処してくれない。つまり、機械ごと処分して新しい機械を購入しなければならなくなる。しかし北城路ではそういった機械の中を開け、故障した箇所を明らかにし、場合によっては部品まで新たに作って修理できるのである。

また、決まった一つのものを作るのではなく個別に柔軟な対応をする北城路の町工場では、作業で資材の余りが出ることが多いが、これらの資材にも使い道を見出す。ある技術者は作業で余った各種のパイプや金属片を作業場の床の隅に集め、必要に応じて使うと言う。

ゴミではない。キルバシ（기루삿시 切れっ端：引用者注）だ<sup>(8)</sup>。これがあれば大きいから切る必要がないじゃないか。いつでも使えるから便利なんだ。（『手で創る未来』：125）

少ない個数でも注文を受けたり、販売元が引き受けないような修理をしたり、作業で余った各種のパイプや金属片を必要に応じて有効活用したりする北城路の町工場では、機械や部品を大量生産する工場とは異なる合理性に基づいて技術者たちが働いていることがわかる。人びとは、大規模な工場には望めない柔軟な対応をし、ニーズに適切に対応してくれる北城路に足を運ぶのである。

以上、北城路で働いてきた技術者たちの語りからは、北城路が米軍部隊、農村、産業化の進展といった外部からの影響を組み込み、その役割の内容を少しずつ変化させながら、工業の拠点として成長してきた様子がうかがえる。1980年代から1990年代までの全盛期を経て、2000年代に入ると資材や部品、工具、機械を扱う店舗、町工場の郊

外移転が進んだ北城路は空洞化が進み、厳しい状況に追い込まれるようになった。しかしながら、大量生産する工場とは異なる合理性に基づいて技術者が働く北城路には、顧客のニーズへの柔軟かつ適切な対応という強みがある。すなわち北城路は空洞化が進んだ現在も、機械や部品を大量生産する工場の存在という外部からの影響を組み込みながら、大邱の工業の拠点としての役割を果たし続けているのである。

## 5. 物理的存在の共有と利用から生まれるコミュニティ

### (1) 都市の中心に町工場が集まっているメリット

次に、資材、部品、工具、そして機械といった物理的存在を通じた技術者たちのかかわりに焦点を当てる。1970年代から北城路で働く技術者は、北城路に店を構えるようになった理由を次のように話す。

その頃（独立した1970年代中盤：引用者注）、この一帯は全部鉄工所だった。（中略）近い業種が集まっているところに来れば、資材の購入もしやすく便利じゃないか。だからこっちに来たんだ。その当時は資本がなくて他人の物件を借りて、（大家から：引用者注）移ってくれと言われたら、移ってやって。そうやってあちらこちら移動しているうちに今のこの場所に来たのが80年度くらいだ。（『手で創る未来』：58）

1970年代の北城路は都市の中心であるのに加え、資材、部品、工具、機械といった町工場に必要な物品を扱う店舗が集まっており、町工場で働く技術者にとっては非常に便利な地区であった<sup>(9)</sup>。この技術者は区画を借りていたため、大家の都合で他の場所に移らなければならない事態も何度か生じたが、そのたびに北城路に留まり続けるという選択をしてきた。だが、このような便利さは先述した北城路の空洞化の進行によって打撃を受けることになる。

最近の仕事を何か頼もうとすると3工団（大邱第3産業団地：引用者注）にも行かなければならないけど、以前は北城路で必要な工程をほとんど全部やったんだ。資材商や取引先も近くであって。（中略）あっちのほうにもたくさんあったのが全部3工団へ引っ越しちゃったじゃないか。（『手で創る未来』：99）

つまり、1990年代から関連業種の郊外移転が進み、工業の拠点が分散化したことによって、以前よりも北城路で町工場を構えるメリットが少なくなってしまったのである。しかし、このメリットは完全に失われたわけではない。

ここに来たのは、91年か92年かに来たんだ。3工団に店を出していたんだが、友人が「北城路がもっといい」と言うから来たんだ。（『手で創る未来』：138）

この技術者は北城路で店や町工場を構えていた人びとが移転していった先である大邱第3産業団地から反対に北城路に移ってきたという。1990年代初めの時点では、郊外の産業団地よりも北城路が有利であると考え移転してきた技術者もいたのである。そして、現在まで北城路に留まり続けていることから、北城路が今も技術者にとって便利な地区であることがうかがえる。 castingをする町工場で働く技術者は北城路の便利さについて次のように述べる。

もともと鋳鉄のようなものは公害のため都市にはいられなくて出ていかなければならないが、うちのような非鉄は都市にあってもあまり問題がないんだ。それを理解しなきゃダメだ。都市にある工場がすべて出て行ったら何か作ろうとする人たちはいちいち遠くまで行かなければならないと。うちは状況に応じて一つだけ必要だと言ってもやってあげる。でも、何か一つだけ作ろうとして高霊工業団地<sup>(10)</sup>まで行くとしたらどんなに高くつくか。（『手で創る未来』：39）

つまり、関連業種が集まっていて技術者の立場として便利であるのに加え、北城路は都市の中心に位置するので町

工場にもものづくりを頼む人びとにとっても利便性が高い。ここで重要なのは、北城路の技術者にとっては注文主が町工場まで足を運ぶのが前提になっていることである。この観点から考えると、北城路はいまだ町工場を構えるのに適した地区といえる。

## (2) 複数の町工場にまたがる工程

大量生産する工場との比較で北城路の町工場が果たす役割を説明する技術者の語りはすでに紹介したが、次の語りは大量生産する工場と一軒の町工場を比較するのではなく、大量生産する工場と北城路の町工場群を比較している。

大きな工場は機械でやって、専門的な作業を主に一つだけやるが、北城路はあの店、この店、やっているのが全部違って、小規模大量品種だからできないことがないんだ。『手で創る未来』：159)

注目すべきなのは、「北城路ではできないことがない」というこの語りが、北城路では複数の町工場が集まっているために町工場間の協働が可能であると指摘する点である。北城路の町工場が生産する商品は多様であり、それゆえそれらの町工場からの受注も多様であり、何でも作ったという技術者は次のように述べる。

北城路というところはありとあらゆるものを扱う店、つまり何でも屋さんだ。(中略) この世の中にモノが数百万種類あるじゃないか。何でも願い通り合わせて作るんだ。うちは鉄工所とつながらないわけにはいかない。うちは基本だけ作るんだ。うちの工場では完成品ができないじゃないか。鋳物を注いだら旋盤をやっている工場に持って行って加工をしなきゃ。ピッタリ合うように。鋳物を注いで作るのには精密さという点で限界があるんだ。だから旋盤をやっている工場に行ったらピッタリ合うようにする。完成品は鉄工所から出てくるんだ。『手で創る未来』：39)

つまり、ある商品を生産するための工程はしばしば複数の町工場にまたがるものなのである。技術者たちが北城路で町工場を構えるのは資材や工具、機械といった必要な物品を求めやすく、注文主が足を運びやすいというだけではない。商品を生産する工程自体が複数の町工場にまたがっているため、町工場が集まっている北城路ではどんな注文にも応えられるのである。北城路に来れば「できないことがない」のは町工場が集まっていて、技術者が協働するからであり、一つひとつの町工場はこの「できないことがない」北城路を構成する要素の一つであると同時に、そこから大きな恩恵を受けているといえる。

## 6. 技術の体得と相互扶助

### (1) 技術者同士のかかわりのなかで体得される技術

これまで述べてきたように、北城路の強みの一つは町工場の協働であるが、その前提には技術者たちのつながりがある。そこで次に、北城路の町工場の協働を支える技術者同士のかかわりに目を移してみよう。『手で創る未来』を読むと、全盛期には何人もの技術者を雇用していた町工場が多かったが、現在は1人ないし2人で町工場を回している場合がほとんどである。つまり、北城路で働く技術者たちの多くは、それぞれが運営する町工場で一人、作業を進めている。しかし、「お昼の時間になると、いつも集まるメンバーがいる。北城路で30年以上知り合いとして過ごしてきた人たちだ。(中略) お互いが仕事をお願いしたり、助けてもらったりしながら同じトンネで支え合い、生きてきた間柄だ」(『手で創る未来』：37) とあるように、昼時に技術者たちが集まることもしばしばである。また、勤務後に集まるケースもある。

(夕方：引用者注) 4時くらいになると、マッコリを飲もうと電話が来る。だいたいうちの事務室か向かいのスーパー、あるいはその隣の食堂でだいたい飲む。普通4時くらいになるとその日のアウトラインが見えてくるじゃ



ないか。「今日はこれだけやれば十分だ」と思えば飲むし、「いやあ、これは酒を飲んだらうまいかなそうだ」と思えば酒を飲まずに仕事をもう少ししてから行くし。<sup>(4)</sup> (『手で創る未来』：197)

このような技術者同士の集まりは単に親睦を深めるためになされているわけではない。なぜなら彼らは経験を積みながら技術を身につけてきたが、その際に技術者同士の対話が重要な役割を果たしていたのである。ある技術者は北城路の草創期、1950年代後半にみずからが試行錯誤しながら技術を体得していく過程を次のように話す。

(技術はどのように身につけたのかという問いに対して：引用者注) 私が入った店は主に軍用エンジンを直すところだったのだが、一つひとつ原理を教えてはくれなかった。当時、北城路にはエンジンを直すところが5ヶ所くらいあったのだけど、技術者たちもエンジンについて全部知っている人は珍しかった。むやみにエンジンを開けてみてはダメにして、怒られることもしばしばだった。そうしているうちに、いつの間にか腕が上がっていたんだ。(『手で創る未来』：175)

技術を身につける方法は試行錯誤だけではない。1960年代後半から北城路の町工場で働き出したある技術者は、町工場を渡り歩きながらさまざまな技術を身につけてきたと言う。

当時はみんなあちこち渡り歩きながら仕事をしたんだ。紹介を受けたり、スカウトされたりして。たとえば勤めていたところで100ウォンもらっていたら、移っていくと120、130ウォンもらえるじゃないか。月給も月給だが、一つの店だけに留まっていたら、他の技術を身につけられないじゃないか。たとえば、この模様に掘るのに店ごとに掘る機械や方法が違うから。それは渡り歩きながら身につけるんだ。(『手で創る未来』：99)

技術者たちが渡り歩いたのは北城路の町工場だけではない。技術者の中にはソウルで働き、大邱では得られない技術を身につけた者もいた。

ソウルで、大邱ではやらないのを教わったんだ。高圧モーター、高圧電動機は、大邱には製作会社がありません、全部ソウルにあった。70年代の話だけれど、当時は炭鉱が全盛期だったじゃないか。ソウルのほうにある大きな会社は炭鉱とたくさん取引をしていたから大きいモーターをたくさん作った。直流電動機とか、高圧モーターとか。大邱ではあまり接することができない技術を教わったんだ。(『手で創る未来』：138)

このように、町工場を渡り歩いてきた技術者たちであるが、彼らは孤軍奮闘して技術を身につけてきたわけではない。1960年代にこの道に入った技術者も次のように語る。

昔は専門学校のようなものもなかったから、同僚たちと対話しながら、尋ねながらして、みずから体得した。(『手で創る未来』：75)

つまり、技術者たちは他の技術者たちとの対話を通して、あるいは他の技術者にみずからが直面している問題を説明してともに解決策を探りながら技術を身につけてきたのである。北城路の技術者たちが頻繁に集まりをもつ背景には、技術者同士の交流が技術に関わる情報交換へとつながる、あるいは技術的な困難に直面した場合や他の町工場との協働が必要な場合に気軽に相談ができる関係を築くという側面も大きいのではないか。

## (2) 技術者同士の相互扶助

このように、技術者同士がかかわりを通じて技術を磨いていくのは決して過去の話ではない。1970年代生まれで2003年に北城路で働き始めたある技術者は、基本的に技術は本やインターネットで独学したと言う一方で、次のよ

うに述べる。

でも、近しくしている技術者の方はG機械の親父さん。あの方は振動ローラー機、道路カッター機、そういうものを作るんだ。あの方は本当に技術を持っていらっしゃる。私が北城路に来てみてからに、あの方の技術が一番優れている。うちが機械の修理だけしていたのが製作もするようになって、あれこれわからないことがたくさん出てくるじゃないか。そういうことは(G機械に:引用者注)行って尋ねたり、アドバイスを受けてりするんだ。親父さんも長いことこの仕事をされてきたが、人はすべてを記憶できない。機械が数十、数百種類あるから。だから、その親父さんも(うちに:引用者注)いらっしゃって、「L君!これが合っているのかね、あれが合っているのかね?」「これが合っています」。このように、お互い相互扶助しているんだ。(『手で創る未来』:199)

この語りからは、技術者同士のかかわりが技術を伝える、あるいは技術を教わるという一方通行の関係ではなく、相互扶助、つまり助け合いの側面があるとわかる。ここで注目したいのは、このようなかかわりが、技術を持たないまま技術者として北城路で働くことになったある男性の生業を成り立たせているケースである。

彼は1990年、技術者の弟に出資を請われ、経営者として北城路にやってきた。経営者の兄と技術者の弟が営む産業用スプリングの町工場は軌道に乗り、大きな利益を得た。しかし、IMF通貨危機の前後に不渡りを何度もくらい巨額の損失が生じたため、事業を整理しなければならなくなる。そして、技術者として働いてきた弟が町工場を離れ建築業へと進み、彼には北城路の町工場と機械だけが残された。実際にやってみたことはなかったが毎日のように技術者がスプリングを巻く様子や図面を見ていた彼は、見よう見まねでスプリングを作り始める。それからおよそ20年経った現在も「私はまだまだ技術者ではないよ」と言う彼は、次のように語る。

実際、今、私が使っている道具も以前に職員たちが作って使っていたものだ。私は作る方法を知らない。作らなければならない場合は、この裏に鉄工所がたくさんあるじゃないか。そこの「S工業所」のようなところに行って「これはどうやってやればいいのか?」と言えば、そこで作ってくれるじゃないか。そこは機械もすべて作る技術者じゃないか。私が「こうやって作ればいいですか?」と言えば「そうやってやるのはダメだ。私が作ってやるよ」そうやって作ってくれて。そうすれば、そうやってやればピッタリできるから。(『手で創る未来』:159)

技術者になろうと思って北城路に来たわけではない彼が退路を断たれた結果、北城路で技術者として生きることになった。その背景に多くの困難があったことは想像に難くない。だが、自分にできない作業を隣接する町工場で働く技術者に相談して解決するというこの語りからは、周囲の町工場で働く技術者とのかかわりが技術を持たないまま北城路に残された彼を支えてきた様子がうかがえる。北城路において技術とは、それぞれの技術をもつ技術者だけが独占すべきものではなく、周囲の技術者と分かち合うものであることが改めてわかる。資材や部品、工具、機械といった物理的存在を通じてつながり合ってきた技術者たちにとって、北城路で得られる有形無形のメリットは社会的に維持されてきた「みんなのもの」すなわちコモングの性格を有していると考えられるのである。

## 7. コミュニティが維持する物理的空間

### (1) 人びとの必要から生まれる技術

ここまで技術者が技術を身につけるにあたって技術者同士のかかわりが重要であり、それが相互扶助や助け合いへとつながり、技術者を支えてきたことを確認してきた。では、この技術はそもそもどのようにして生まれるのだろうか。北城路の草創期を知る技術者はその様子を次のように語る。

当時「鋼板工」といえば、日常生活に使われるさまざまな家財道具を扱う仕事をした。洗面台、バケツ、オイル

ランプ、釜にいたるまで、作れないものも直せないものもなかった。（『手で創る未来』：19）

朝鮮戦争休戦後から間もない、モノが簡単に手に入らない時代に、北城路の技術者は人びとの生活の必要に応じてさまざまなモノを生産し、そして修理していた。この人びとの必要に応じるために鍛えられていったのが彼らの技術だったのである。人びとの必要に応じる姿勢は、今も北城路に根づいている。

あちこちから問題があるモノを持ってくる人が多い。古い機械、部品がない機械、改造された機械等。お金にならないし面倒な仕事が多いが、噂を聞いたり他の店からの紹介で来る人たちだから、そのまま追い返すわけにはいかない。（『手で創る未来』：77）

この技術者の語りからは、彼の技術と経験が壊れてしまった機械を修理する最後の砦なのが見える。このように、人びとの切実な必要に応じてきた北城路の技術者たちは、北城路まで足を運んだ注文主との直接的なやり取りを通じて製品を生産したり、修理したりする。この過程は技術者をして使用者の立場からの製品開発をせしめる。

今でも農業機械というものは数多く開発されているが、会社自体は自分たちが農業をやらないからわからない。農民たちがすべて開発してくれるのだ。（『手で創る未来』：119）

農業を営む人びととの直接的なやり取りこそが新たな製品の開発へとつながっていくというこの技術者の語りからは、技術者と使用者が共同で機械を開発できるのが北城路の町工場の強みとして認識されているのがわかる。

## (2) 限られた町工場の空間を使いこなす工夫

このように人びとの必要に応じて技術を鍛え、製品を生産し、修理してきた北城路の技術者たちであるが、みずからの必要にも技術を使って対応してきた。彼らは町工場での作業に必要な工具や機械を創意工夫しながら作り上げてきたのである。たとえば、ある技術者は自作の油圧プレスについて次のように説明する。

このプレスは作ってから15年ほどが経った。米軍部隊から出てきた古物を改造して作ったんだ。ハンマーですぐと作業をしていると大変でもあるし、作業の精度が落ちる。油圧プレスは力もよく、精度が高いからこれを導入したいと思って見てみると、市販の油圧プレスはあまりに大きくうちの店には置く場所がない。だから私の作業場、私の体に合う機械を使おうとこれを作ったんだ。（『手で創る未来』：187）

ここで注目すべきなのは、彼が自分の働く町工場という制限された空間の中でも使えるようにわざわざ油圧プレスを自作した点である。機械の大きさや作業内容から必要な広さを確保するのではなく、既存の空間で作業するために工夫する。これは彼だけに限ったことではない。北城路の技術者たちは持ち前の技術を活用して何かと制限の多い北城路の建物を使いこなしてきた。たとえば、

（北城路の全盛期は：引用者注）1970～1990年。以前は北城路には小さな鉄工所が多かった。この店の中を5区画に分けて5軒の工業社が入るくらい栄えていた。（『手で創る未来』：115）

という技術者の語りからは、現在は一つの町工場として使っている区画を、北城路の全盛期には5つに分けて使うことによって、狭くはあるがより多くの技術者が独立して働けるように工夫がなされていた。北城路の技術者たちは現在も、体積が大きい製品を扱うために建物だけでなく裏にある庭を野外作業場として使ったり、隣りの区画を使っていた町工場が去ったのを受けて作業場を拡張したりするなど、限られた空間を臨機応変に活用している。

このように技術者たちが工夫しながら使っているのは区画だけではない。北城路の町工場の中には日本による植民

地時代の建物を使っているところもある。たとえば、ある技術者は日本による植民地時代にまで遡る建物の由来や、その古い建物をどのような工夫をしながら使っているのか、次のように説明する。

ここは日帝時代（日本による植民地時代：引用者注）のとき米の倉庫だった。ここの床を掘ると5層になっているんだ。天井は4層で。床が一番下に湿気が上ってこないように地面を掘ってビニールを敷いて、その上に小石を載せて、次に砂の層を入れて、このように湿気が上ってこないようにしているんだ<sup>(12)</sup>。『手で創る未来』：41)

「これは日帝時代の建物だから雨が降るとあちこち水が漏れる。周期的に補修してあげなければならない」（『手で創る未来』：124）という技術者の語りからもわかるように、日本の植民地時代の建物は彼らが手を加え続けなければ使えない、使い勝手の悪い建物である。一方、ある町工場では露出している木造の天井の梁に電線をかけたり、重いものを動かす際に使うホイスト等をかけておいたり、といったふうに、古い建物の構造をうまく使って作業をスムーズに進められるように工夫している。

以上からわかるように、北城路の区画や建物は、町工場で働く技術者でなければ使いこなせない。北城路は技術者に技術を体得させると同時に、彼らの技術によって維持され続けている空間であるといえる。

## 8. 結語

本稿は、韓国の都市におけるコミュニティを捉えるために、町工場が集まる北城路で働く技術者たちの語りを、資材、部品、工具、機械といった物理的存在の共有と利用に注目して分析した。北城路の町工場から構成されるコミュニティは米軍部隊、農村、産業化の進展、郊外における工業団地造成といった外部からの影響を組み込み、その役割を変化させながら今日まで工業の拠点として維持されてきた。関連業種が集まっているため、北城路では資材、部品、工具、機械といった町工場が必要とされるモノが手に入れやすい。加えて、複数の町工場にまたがる生産工程、言い換えるならば技術者たちの協働が可能であるため、あらゆる注文に対応できる。このように物理的存在を介して技術者たちはつながるが、このつながりは同時に社会的なつながりでもある。技術者たちは日常的な交流や親睦の集まりを通じて、技術に関わる情報を交換しながら技術的な困難に直面した場合や他の町工場との協働が必要な場合に気軽に相談ができる関係を構築している。このような関係はそれぞれの技術者が技術を身につける契機となると同時に、技術者同士の相互扶助へもつながっていく。それぞれが独立した町工場を営みながらも協働や相互扶助を重ねていく技術者たちの語りからは、北城路があたかも「みんなのもの」すなわちコモンズとして立ち現れてくるのである。最後に指摘しておかなければならないのは、技術者たちの技術があっちはじめて狭い区画、古い建物といった物理的な制限の多い北城路がコモンズとして成り立っている点である。町工場が集まる北城路は都市のコミュニティの中でもかなり特殊なコミュニティである。しかし、資材や部品、工具、機械といった物理的存在の共有と利用を通じてつながる技術者たちの語りからは、地縁的ユニットと社会的ユニットが大きく重なる都市のコミュニティが浮かび上がるのである。

## 注

- (1) ただし伊藤によると、自治的な性格を有する地域組織が発達する日本の都市の場合が特殊であるという（伊藤 2002）。
- (2) セマウル運動は、1970年4月22日に朴正熙大統領の提唱によってはじまったとされる政府主導の運動である。当時の農村部と都市部の格差を背景として、農村の貧困克服、経済水準の向上をめざす運動としてはじまった。1976年からは都市でも展開されていった。以上、韓国・行政安全部国家記録院のWebサイト『セマウル運動記録物』「セマウル運動とは」を参照した。
- (3) 洞とは、韓国の基礎自治団体である自治区・市の下部行政単位である（自治体国際化協会 2015）。
- (4) 『[新版] 韓国朝鮮を知る事典』は、契（계）を朝鮮の伝統的な相互扶助組と説明する。日本の頼母子などに類似するこの契は、目的に応じて成員数、成員の属性、事業規模、運営方法、集団の永続性の点で違いがあるが、加入者の平等互恵の契約精神はいずれの契にも徹底しているという。
- (5) 北城路付近に居住するインフォーマントによると2021年12月現在、該当地区はマンション建設の最中とのことであった。
- (6) 韓国において朝鮮戦争は開戦日にちなみ6.25と呼ばれることが多い。

- (7) ただし、IMF 通貨危機がみずからの町工場に大きな利益をもたらしたという技術者もいる。当時、仕事がなくなり村に戻った人、会社勤めに見切りをつけて新しく商売を始めようとする人びとが多かった。つまり、IMF 通貨危機のおかげで農業や自営業に新たに参入する人びとが必要とする機械の受注生産という新たな仕事が多数生まれたのである。
- (8) このように、北城路の町工場では日本語に由来する言葉が専門用語としてしばしば使われている。詳細は時間と空間研究所が刊行した『北城路近代技術用語使用説明書 北城路用語辞典』を参照のこと。
- (9) ある技術者は「工具を自分なりに分類して、大きさに合わせて分けて置く。工具商人のようにきちんと整理しておくので近隣の工業社（の技術者：引用者注）たちが必要なモノをしょっちゅう借りていったりする」（『手で創る未来』：146）とあるように、技術者の間で工具等を貸し借りする場合もある。
- (10) 大邱広域市の南西に位置する高霊郡に位置する産業団地である。
- (11) 北城路の技術者同士の親睦にはこの他にも多様なかたちがある。『手で創る未来』で確認できただけでも2~3つの親睦会が存在し、集まってお酒を飲んだり、観光に行ったり、契をおこなったりしていた。また、山岳会を結成していた技術者もいれば、北城路で働く仲間と毎週のように釣りに行くという技術者もいた。
- (12) 『手で創る未来』によると、この場所は日帝強占期、「丸星」という物資運送及び荷役作業会社の倉庫として使われていた。そして解放後は倉庫あるいは工業所として使われてきた（『手で創る未来』：41）。

## 参考文献

- 藤村美穂, 2001, 「『みんなのもの』とは何か——むらの土地と人」井上真・宮内泰介編『コモンズの社会学——森・川・海の資源共同管理を考える』新曜社：32-54.
- 自治体国際化協会, 2015, 『韓国の地方自治——2015年改訂版』（2021年12月23日取得, <http://www.clair.or.jp/j/forum/pub/docs/j52.pdf>）
- 井上真, 2001, 「自然資源の共同管理制度としてのコモンズ」井上真・宮内泰介編『コモンズの社会学——森・川・海の資源共同管理を考える』新曜社：1-28.
- 猪瀬浩平・森田友希（写真）, 2019, 『分解者たち——見沼田んぼのほとりを生きる』生活書院.
- 伊藤亜人, 2002, 「韓国における任意参加の組織——地方出身者の結社を中心として」伊藤亜人・韓敬九編『韓日社会組織の比較』慶應義塾大学出版会：185-211.
- 伊藤亜人ほか監修, 2014, 『[新版] 韓国朝鮮を知る事典』平凡社.
- 松井理恵, 2011, 「現代韓国における地域環境運動の社会学——大邱・三徳洞の事例から」2010年度 筑波大学大学院博士課程人文社会科学研究科博士論文.
- , 2017, 「景観保全を通じた都市の継承——韓国・大邱の近代建築物リノベーションを事例として」『現代社会学研究』30：27-43.
- , 2018, 「コミュニティに敵産家屋を取り入れる——韓国・大邱の北城路における生活実践の履歴の可視化」鳥越皓之・足立重和・金菱清編著『生活環境主義のコミュニティ分析——環境社会学のアプローチ』ミネルヴァ書房：171-190.
- 嶋陸奥彦, 1984, 「韓国のムラートンネとマウル」『日本民俗文化大系』月報7: 12-14.
- 武田俊輔, 2019, 『コモンズとしての都市祭礼——長浜曳山祭の都市社会学』新曜社.
- 鳥越皓之, 1994, 『地域自治会の研究——部落会・町内会・自治会の展開過程』ミネルヴァ書房.

（韓国語）

- 大邱市, 1978, 『班常会白書 1976-1978』
- 행정안전부 국가기록원, 2021, 「새마을운동이란」『새마을운동 기록물』（=行政安全部国家記録院, 2021, 「새마을운동とは」『새마을운동記録物』）（2021年12月23日取得, <https://theme.archives.go.kr/next/semaul2016/viewSub.do?dir=sub02&subPage=sub02-1-1>）
- 사단법인 시간과공간연구소, 2016, 『손으로 만드는 미래—북성로 철공소』대구광역시 중구청（=社団法人 時間と空間研究所, 2016, 『手で創る未来——北城路鉄工所』大邱広域市中区庁）
- 사단법인 시간과공간연구소, 발행년불명, 『북성로 근대기술용어 사용설명서 북성로용어사전』대구광역시 중구청（=社団法人 時間と空間研究所, 発行年不明, 『北城路近代技術用語使用説明書 北城路用語辞典』大邱広域市中区庁）